

オンライン授業余滴

—コロナ禍のなかでの南山大学 2020 年度スペイン語教育実践報告—

中沢 知史

南山大学外国語学部スペイン・ラテンアメリカ学科 講師

抄録：本稿は、コロナ禍に見舞われた 2020 年度南山大学におけるスペイン語教育の実践報告である。まず、パンデミック下での大学教育の経験を共有する意義について、筆者の問題意識を述べる。次に、講義の全面オンライン化への移行に伴い、どのような準備作業を経たかを振り返って記録する。そして、Zoom を使用した授業実践について、プリントの配布、講義資料の提示と板書、学生の参加、聴解と発音の指導及び小テストの実施などの方法を具体的に記述する。最後に、オンライン授業の特性とデメリットについて若干の考察を行う。本稿で示す実践報告を通じて、パンデミックのなかスペイン語教育に携わる教職員及びスペイン語の教員免許取得を目指す学生に示唆を与えることを目指す。

はじめに

2020 年 12 月末、スペイン版「流行語大賞」に confinamiento が選ばれた¹。"Confinamiento" は、例えば『小学館西和中辞典』によると、「幽閉」を意味する語であるが、2020 年の新型コロナウイルス（COVID-19）流行対策としてとられた都市封鎖（ロックダウン）とそれに伴う外出自粛に対応する語として用いられるようになり、広く人口に膾炙することとなった。

本稿執筆時点（2021 年 1 月末）で、例えば英国において三度目の都市封鎖と厳しい外出制限が実施中であり、パンデミック下における「新常态」として confinamiento/lockdown は定着しつつある。また、日本では 2020 年秋からの感染再拡大に伴い、菅（すが）政権が年明け 21 年 1 月 7 日に東京、神奈川、埼玉の 3 県に緊急事態宣言を発出した（のちに大阪、兵庫、京都、名古屋、岐阜、栃木に拡大）。期間は一ヶ月程度とされたが、目下延長が取り沙汰されている状況である。本稿は、私権を制限しない、いわゆる「お願いベース」の日本型ロックダウン実施期間中に執筆されている。

2020 年は感染症に関わるさまざまなジャーゴンが飛び交ったが、大学関係者の間では「ロックダウン」よりも「ロックアウト」のほうがより多く用いられてきた。「ロックアウト」は、大学等高等教育機関が入学試験実施期間中に学生の構内立ち入りを制限する用語として使われてきたのである。今日では、逆に「ロックアウト」を感染症対策でいう「ロックダウン」の意味で使う用例も散見される²。これらの語には、どこかしら自由の規

¹ "confinamiento, palabra del año 2020 para la FundeuRAE," 29 de diciembre de 2020, <https://www.fundeu.es/recomendacion/confinamiento-palabra-del-ano-2020-para-la-fundeurae/?fbclid=IwAR0GKEKtqL9poyqG-tpZYRU5yLMY5epIdvmD6cxqjhH6CTZiqeDkJZeX00E>（最終閲覧日：2021 年 1 月 31 日。以下ウェブサイトの閲覧日は全て同じ。）

² 例えば、「(新型コロナ) 山も湖も「ロックアウト」 筑波山・霞ヶ浦／茨城県」(『朝日新聞』茨城版朝刊、第 27 面、2020 年 10 月 11 日)、小野正嗣「(文芸時評) 自由を奪うのは ウイルスでなく、根拠なき

制や、排除といったニュアンスがつきまとう。初等・中等教育機関が一度目の緊急事態宣言解除後、早々に対面授業を再開するなか、ひとり大学だけがいわば通年でロックダウン／ロックアウトを実施し、教員の怠慢ゆえに遠隔・オンライン授業に拘泥して学生をキャンパスから締め出しているかのような誤った認識へと誘導しかねないメディア報道も未だに存在する³。

事実は、今も続くロックダウン／ロックアウト中、大学教員は膨大な時間を費やしてオンライン授業を成立させ、学生の学習機会を正当な理由なく奪わないことに全力を傾け、学生⁴も趣旨を理解しこれに応えてきたということである。

本稿は、以上に言及した一部報道に誘導され、2020年の大学における学びが誤解されたまま誤った認識が一人歩きしてしまわないよう、浅学非才、経験不足を承知であえて授業実践を「見える化」しようと試みる⁵ものである。同時に、このような「見える化」作業は、講義という知的営為を大学の中だけに閉じ込めておくべきでないとの問題意識にも基づいている。

1. オンライン授業の準備

2020年3月、新規採用の南山大学外国語学部スペイン・ラテンアメリカ学科特任講師として採用手続を進め、シラバスを準備した段階では、新型コロナウイルス（COVID-19）の感染者が日ごとに増えていく情勢ではあった（図1参照）ものの、政府による緊急事態宣言は未だ発出されていなかった。シラバスも、対面授業を想定して執筆し入稿した。しかしその後、事態が急変し春学期の授業開始延期、入学式中止の措置がとられ、また全面的にオンライン授業に移行することが確実な情勢となった。第一クォーターの開始が4月24日（金）となり、講義回数は8回、定期試験は実施しないとの決定によって、筆者の場合、1ヶ月弱の間に名古屋への転居と授業形態の変更に対応するための準備⁶を済ませるこ

言葉」（『朝日新聞』第25面、2020年12月30日）など。

³ 例えば、文部科学省が2020年10月に実施した調査結果に基づいて、「対面授業 学生のため 再開模索の時（解説）」（『読売新聞』朝刊第26面、2020年12月24日）や、「187大学 対面授業「半分未満」 感染対策に苦慮 「遠隔」続く 文科省調査、首都圏で再開の動き重く。」（『日本経済新聞』朝刊第42面、2020年12月24日）などの記事が書かれている。こうした記事は首都圏に所在する大学を想定して書かれているが、記事が書かれた数日後には世論調査の結果から政権支持率が大幅に下落したことが判明し、再度の緊急事態宣言発出が不可避となる情勢になったことを考えると、2020年末のクリスマスシーズン時点では対面授業再開について楽観的な空気が未だ存在していたことが分かり興味深い。

⁴ コロナ禍における大学生の置かれた状況については、小林雅之「コロナ禍の学生の経済的困難と支援策」（『都市問題』第111号、2020年12月、pp.4-9）を参照。また、直接会うことのできない学生の声を拾うにあたり、ツイッター上でハッシュタグ「#大学生の日常も大事だ」を付した投稿が参考になった。

⁵ こうした試みの一例として、大嶋えり子・小泉勇人・茂木謙之介編『遠隔で作る人文社会学知』（雷音学術出版、2020年10月）が挙げられる。共編者は、コロナ禍の大学における遠隔授業実践を記録し公開することを目的として、SNSを利用して執筆者を募った。同書は123名の執筆者（筆者は第一クォーターの「ラテンアメリカ史A」の授業実践報告を寄稿）を擁し、全文がインターネット上で無償公開されている（<https://drive.google.com/file/d/122iN7z4cuJmVlHWx59716DQhHSHv2JL/view>）。

⁶ 前掲の『遠隔でつくる人文社会学知』への寄稿では紙幅の都合で言及できなかったが、2020年3月は多くの図書館が休館しており、準備過程で必要になった文献を入手できないことが大きな痛手となった。急きょ名著ウィリアム・H・マクニール『疫病と世界史 上下』（佐々木昭夫訳、1985年新潮社初版、2007年中公文庫）が必要になり、唯一開館していた看護師養成校の図書館に駆け込んでコピーをとったことをよく覚えている。なお、コロナ禍における図書館の休館問題については、ツイッターアカウント「図書館休

とになったのである。

第一クォーター開始までのあいだに行った講義のオンライン化への対応について、ハード面とソフト面から述べる。ハード面では、筆者は既にカメラ、マイク内蔵のノートPC（FUJITSU LIFEBOOK）を所持していたので、インターネット通信環境と発声ができる環境があればオンライン授業を行える状態であった。しかし、ノートPC内蔵のマイクでは音質が悪く、また周囲の雑音を拾ってしまうため、マイクとイヤホン、そしてこれは講義開始後であるが、放熱のために冷却用ファンを買い足した（写真1参照）⁷。

ソフト面では、大学がオンライン授業のプラットフォームとして指定したZoomをインストールし、学内関係者が用意した速習の研修⁸を受けて遠隔・同期型（いわゆるライブ形式）授業のイメージトレーニングをしつつ、Powerpointを使った授業スライドを準備した。また、新たに立ち上がったFacebookのグループ「新型コロナのインパクトを受け、大学教員は何をすべきか、何をしたいかについて知恵と情報を共有するグループ」⁹に加わったが、手探り状況で周囲に相談する機会が極めて乏しいなか、情報交換の場として非常に有用であった。

2. オンライン授業事始め：スペイン語のオンライン授業実践

2020年度に筆者が担当した語学科目は、外国語学部スペイン・ラテンアメリカ学科の2年次生を主たる対象とする「中級スペイン語ID」（第一クォーター開講）、「中級スペイン語IID」（第四クォーター開講）、そして総合政策学部の1年次生を対象とした第二外国語

Japan: What is the daily number of confirmed cases?

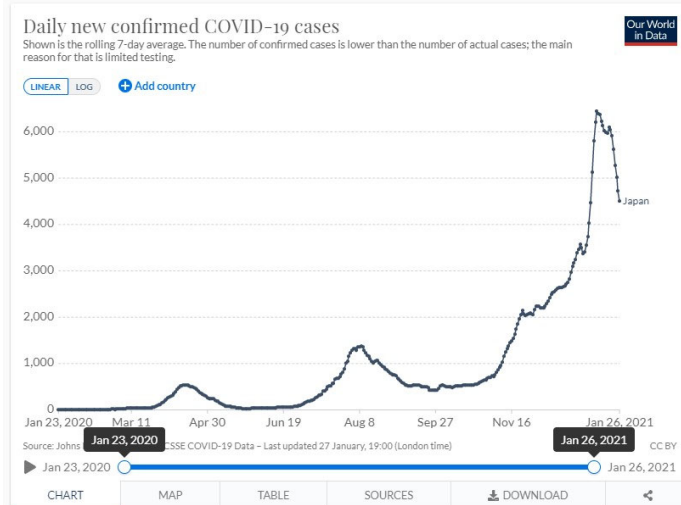


図1：日本の新型コロナウイルス新規感染者数の推移（2020年1月23日～2021年1月26日）出典 <https://ourworldindata.org/coronavirus/country/japan?country=~JPN>

館対策プロジェクト」（https://twitter.com/closedlibrary_c）の活動を参照。

⁷ この時期、多くの事業所が一斉にオンライン会議システムに移行したためか、家電製品店では関連する機材が品薄になっている状況であった。

⁸ この間の関係者の努力は驚異的である。関わった多くの方々に感謝したい。なお、名古屋への転居前、筆者は東京都郊外のシェアオフィスを利用していたが、地元の高校生で構成されるユーチューバーのグループやオンラインサロンを主催する利用者がいることも手伝ってオフィススタッフに理解があり、情報交換をしたり助言をもらえたことも幸いであった。

⁹ https://www.facebook.com/groups/146940180042907/?multi_permalink=322090622527861。同グループは本稿執筆時点でメンバー2.1万人を数える。

としての「スペイン語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」(通年)である。「中級スペイン語ⅠD」及び「中級スペイン語ⅡD」は外国語学部スペイン・ラテンアメリカ学科の必修科目であり、むろんスペイン語の教員免許を取得しようとする学生は必ずこの授業の単位認定を受けなければならない。以下、これらの科目を中心に、教室での対面授業との違いに着目しながら授業実践報告を行う。



写真1：筆者のオンライン授業機材

まず、教室という物理的空間ではなく Zoom ミーティングルームというオンライン上の仮想空間に講義の場が移ったことで、プリントを配布する方法が変わった。印刷したプリントを教室で配布するかわりに、大学が用意した専用のサーバー¹⁰を介して、データファイルの受け渡しを行う。ただし、この方法では、学生が必要に応じて各自で資料を印刷する必要がある。筆者がこれまで実践してきた範囲では、学生は自宅にプリンターを備えているとは限らず、コンビニエンスストアなどで出力せざるをえない場合もある。このような状況を踏まえ、筆者の場合、学生に渡す資料は①コンビニでの出力に対応して PDF で配布、②なるべく枚数を減らす、③モノクロ化する、などの工夫をした。

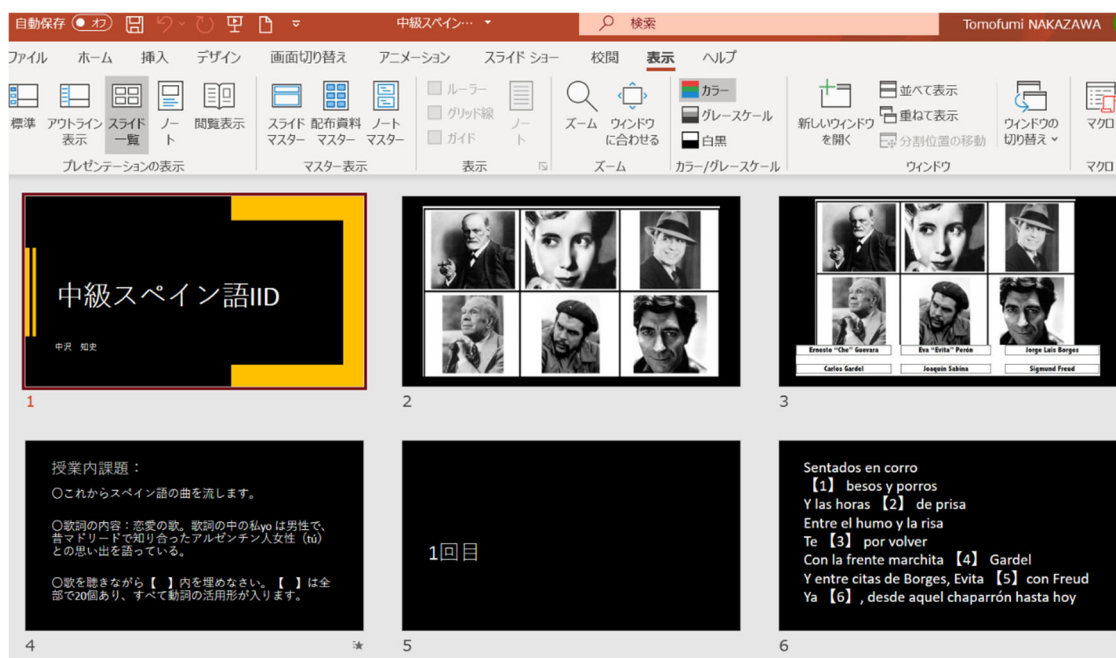


図2：講義スライドの例

¹⁰ 講義資料サーバー「Handout」<https://handout.nanzan-u.ac.jp/classes/>

図2は、講義スライドの例である。オンライン授業は眼に負荷がかかるため、また色覚多様性への配慮から、講義中は黒地に白抜き文字を使用している。文字はなるべく大きくし、1つのスライドにあまり情報を詰め込みすぎないようにしている。学生に渡す際はこれを反転させ、単純白黒のかたちでPDF化し、さらに1ページに6スライドを収める「配布資料」形式でサーバーにアップロードした。

次に、板書の方法についてである。板書については、Powerpointのポインター機能やZoomの「コメントを付ける」機能を主に活用した。準備したPowerpoint資料をスライドショーのかたちでZoomの画面共有機能を使って学生に提示しつつ、教室空間でレーザーポイントを用いるのと同様に重要箇所をハイライトすることができる。

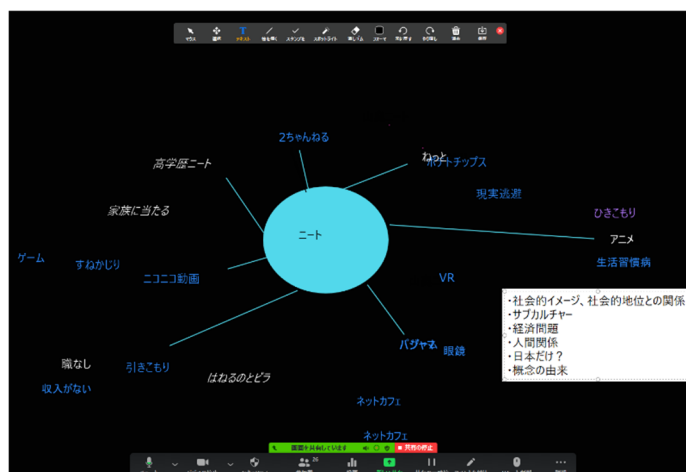


図3：ブレインストーミングの様子

またZoomの「コメントを付ける」機能を用いれば、画面に文字を書き込むことができるため、例えば訳語や動詞の活用形を画面上で板書することができる。そして、「コメントを付ける」機能はミーティングルームの参加者全員、つまり教員と学生が一つの画面で作業をすることが可能であるため、「このなかから動詞<IR>の活用形を指摘してください」「この部分の訳を画面に書き込んでください」などの指示を容易に出すことができる。同機能はさまざまに応用が可能であり、前述のFacebookグループで共有される実践を参考に、例えば、初回のいわば「掴み」として「地図を見せながら『みなさん今日はどこから受講していますか』と問いかけて地図に自分の位置をマークさせる」、あるいは、「ある言葉を提示してその言葉から何を連想するか、めいめい画面に書き込ませてブレインストーミングを行う」などの活動を行った（図3参照。ただし画像は第二クォーター「基礎演習」のもの）。

そして、聴解や発音の指導である。聴解については、CDやDVDなどの物理ディスクは「コンピュータの音声を共有する」をONにすれば画面の向こうの学生にも聞こえるため、オンラインへの移行に際して困難を感じることはなかった。また、スペイン語の教科書を編集、販売する出版社のなかには、これまで付属CDのかたちで提供していた音声データをウェブサイトでストリーミング再生できるようにしたり、ダウンロードできるようにしているところもあり、オンライン化により学習の効率性向上は加速したと言えるのではないかと。特に、講義外で音声を聴いて取り組ませる課題を指定する場合、音声データが物理ディスクから解放されるメリットは大きい。

オンライン化により、発音の指導にも変化が生じた。筆者の場合、講義中の発音指導に加えて、「中級スペイン語ID」において発音の小テストを行った。まず、Zoomの「待機室」機能を使って、受講者に「待機室」に入室してもらう。そこから、一人ずつランダム

にミーティングルームに入室してもらい、画面上に現れる短い文（画面切り替えに手間取らないようあらかじめループ状にしてある）を二度ずつ読んでもらう。テスト時間は120秒から180秒で、一人あたりおおそ4～6つの文を声に出して読んでもらう。評価は、評価ポイントを記したシートを作成して手元に置き、学生の発声を聞きながら記入する。評価に誤りがないか、録画データを見ながら再度確認を行う。さらに学生の要望に応じ、別途個別に1対1での練習の機会を設ける。飛沫による感染リスクに鑑みて、語学教育における発音指導・テストは以上の例のように、当面オンラインを前提とすることが新常态になるであろう。ただし、このやり方での発音小テストは、受講者数が多い場合、講義時間（90分）内で終了させるために「待機室」での待ち時間が長くなるという問題が生じることを付言しておく。

3. 考察と残された課題

森田裕介は、雑誌『都市問題』の特集「コロナ禍と大学」のなかで、オンライン授業の特徴を①再視聴可能性、②時間的・空間的制約からの解放、③多様性への対応の三つに整理している¹¹。筆者はこれに加えて、「対面」のプレッシャーからの解放を指摘しておきたい。指名して発言させる機会が多い語学科目では特に、指名されることへの心理的障壁が下がることは望ましい。チャット機能を使用しての参加度、双方向性の高まり、誤答を恐れなくなるなど、LINEなどのコミュニケーションツールが学生間にほぼ完全に普及している状況では、「気楽さ」が優位に働く場面もあろう。

他方で、オンライン授業にある種の息苦しさを感ずる声も学生からは聞かれる。例えば、SNS上で「反動的対面主義者」を名乗るある早稲田大学法学部生¹²は、プレ・コロナの時代の学生生活では当たり前だった、対面授業の合間合間で交わされる何気ない日常会話を「余白」と呼び、その「余白」こそが重要であったと指摘する。オンライン化でさまざまな「余白」、例えば「雑談」が消失し余裕がなくなったとの声は、オンライン授業のみならずさまざまな場面で聞かれる。筆者もこの間、そのような「余白」をオンライン授業の過程に導入できないか幾度か試みはしたものの、思うようにゆかず結果的に学生に窮屈な思いをさせたかもしれないことを述べておく。

おわりに

以上、すべてが手探り状態の2020年度、スペイン語科目を中心に筆者の授業実践を紹介した。オンラインか対面かという点については、「オンライン化で授業の質が下がった」という意見もあり、またその正反対の指摘も存在する。そもそも「授業の質」とは何かという点も含め、オンライン化の影響については経験の蓄積を踏まえた今後の冷静な分

¹¹ 森田裕介「大学における授業のオンライン化と今後の展望」『都市問題』第111号、2020年12月、pp. 10-14。

¹² 植田将暉「オンライン授業で消えた大学の「余白」 日常の何気ない会話が大切だった」『早稲田ウィークリー』2020年6月11日
https://www.waseda.jp/inst/weekly/news/2020/06/11/75525/?fbclid=IwAR2GcoQbXf_OTBM3gRexfQMzKxGZgeUN57jWgRmyF6Syq70vecyH9-gVd5c

析と評価に委ねるほかはない。ここでは、画面越しではあれ 2020 年度をともに過ごした学生への感謝の言葉を残しておきたい。登校して大学の施設を利用することができない、アルバイト収入が大きく減少するなど、学生生活に甚大な影響が出たであろうことは想像に難くない。また、感染拡大の収束が見通せないなか、オンライン授業という「新常態」に適応しながら日々を送ることは大きな負担であったと想像される。このような状況下で、大学における学びを止めることなく辛抱強く講義を受講し課題に取り組んだ学生に敬意を表するものである。